森 志げ「波瀾」論

——自己開示と相互理解を重ねる夫婦二人きりの旅路——

鈴木ちよ

はじめに ——「森 志げ」という作家と「波瀾」——

「森 志げ」という作家に関しては、林 廣親が述べているように「今日ではほとんど忘れられたに等しい存在と言ってよい。その名が、鴎外の妻、それも「半日」の中の〈奥さん〉に擬せられるような妻としての彼女への関心を別にして語られることはまれ」となっている。[1] さらに、過去に遡っても森志げ評価の試みは少ない。まとまったものとしては、塩田 良平[2]や松原 新一[3]による論述に限定されている。その他にもいくつか論文はあるものの、作品自体を読み込み分析したものは余りにも少ない。

初めに、簡単に森 志げの略歴を紹介する。森 志げは、明治一三（一八八〇）年の五月三日、東京府芝区西久保明船町に、大審院判事の父荒木 博臣と母 阿佐の長女として生まれた。華族女学校に通い、資産家の渡邊 勝太郎と結婚するが、勝太郎の女性問題が原因となり、僅か二〇日間で離婚。その後、森 鷗外と再婚。福岡県小倉での生活後、鷗外が第一師団軍医部長に補せられたため、上京して観潮楼（鷗外が建てた邸宅）に入り、鷗外の母である峰子、鷗外と先妻（赤松 登志子）との子どもである於菟（おと）も交えて暮らし始めた。その後、長女茉莉（まり）、次男不律（ふりつ）（夭逝）、次女杏奴（あんぬ）、三男類（るい）を産み育てた。その傍ら、作家としての執筆活動を開始し、極めて短期間（約三年間）に二四もの作品を精力的に発表した。

「波瀾」は、森 志げにとって二作目の作品であり、主人公の富子と夫の大野 豊の新婚生活を描いた中編小説である。[4] 結婚式翌日、新橋から汽車で九州の小倉へと向かい、同地での新しい生活が始まるが、夫の転勤によって帰京が決定され、汽車に乗り東京へと戻ろうとする場面で終わる。一月初旬から三月下旬までの約三か月弱が描かれている。

本稿では、この「波瀾」という作品について、主人公である富子と夫の大野を中心に、関係性の変化と構成に着目しながら論じ、作者の志げが描こうとしたテーマに迫りたい。

一、作品の構成——作品内の展開と時間——

語りの形式としては三人称ではあるが、主人公である富子の視点や心情に相当寄っている。作品内の時間については、一月（正月）四日午後四時に髪結へと駆け込む場面に始まって、三か月が経とうとする三月二五日午後四時に小倉発の汽車に乗り門司へ行き、門司から乗り換えた急行の夜汽車の中で幕が下りている。

また作品内の詳細な年については明らかにされていないが、二点の

理由から恐らく一九〇二（明治三五）年ではないかと推察ができる。一つ目は、この「波瀾」という作品の大筋と合致する作者である志げ自身の新婚生活が、一九〇二（明治三五）年に始まったからである。志げは一九〇二（明治三五）年一月、第一二師団軍医部長で当時小倉在住であった森 鷗外と再婚する。そして物語同様、二人は京都滞在を挟みながら小倉へと移って新婚生活を過ごし、鷗外の異動を機に、同年三月下旬に東京に戻っている。

二つ目は、作品に描かれている鉄道事情から窺い知れる。「波瀾」において、富子と夫は新橋から汽車で九州の小倉へ向かうが、現代と異なり、そう簡単には運ばない。以下、移動の行程をまとめる。

一月四日　夜（午後七時前後）　汽車に乗車　新橋→京都
五日　朝　京都着　下車
午前八時頃　人力車に乗車　京都の旅館「俵屋」着　宿泊
六日　午後三時五八分　汽車に乗車　京都→馬関
七日　午後〇時頃　馬関着　下車
連絡船（小蒸気）に乗船　馬関→門司
午後〇時一五分頃　門司着　下船
汽車に乗車　門司→小倉
昼下がりの午後　小倉着　下車
人力車に乗車　小倉の旭町に近い借家着

右記のような旅程となったわけだが、鉄道というのは、明治時代になって登場した画期的な移動手段であった。一八七二（明治五）年に、日本国内で初の鉄道路線（新橋―横浜間）が開通し、その後少しずつ区間を拡張。一八七四（明治七）年に大阪―神戸間開業。一八七七（明治一〇）年に大阪―京都間が全通し、京都―神戸間鉄道も開業する。一八八九（明治二二）年には、東海道線が全通となる（新橋―神戸間）。一八九六（明治二九）年に新橋―神戸間で初の急行列車が運転され、一九〇一（明治三四）年には山陽鉄道が神戸―馬関（下関）間で全通となった。[5]

以上が本州での鉄道敷設の流れであるが、一方で九州においては、九州鉄道による私鉄という形で鉄道がつくられていった（一九〇七（明治四〇）年には「鉄道国有法」に基づき国有化された）。一八八九（明治二二）年に九州初の鉄道として博多―千歳川間が開業。一八九一（明治二四）年博多―門司間が全通し、門司―熊本、鳥栖―佐賀間が開業。一八九七（明治三〇）年門司―小倉間が複線化。一八九八（明治三一）年八月から徳山―門司間で連絡船による山陽鉄道と九州鉄道の連絡が始まった。一九〇一（明治三四）年に神戸―馬関（下関）間が全通し、同日より、連絡船は馬関―門司間となった。[6]

ここで改めて「波瀾」における富子と夫との旅程を確認してみると、新橋から京都、京都から馬関へ汽車で移動後、馬関から門司まで連絡船（小蒸気）に乗り、門司から小倉までは再び汽車に乗っている。神戸―馬関間が全通し馬関―門司間を連絡船が繋ぐようになったのは一九〇一（明治三四）年のため、「波瀾」の世界はこれ以後の時間に存在していると言える。そして一九四二年（昭和一七年）に関門鉄道トンネルが通ったため、関門連絡船は「鉄道連絡船」としての役割を終えている。なお、新橋から馬関へと到着するまでに京都での宿泊を挟んでいるのは、休息とレジャーとの双方を兼ねてのことであったと思われる。

以上の二点の理由により、「波瀾」が描いているのは一九〇二（明治三五）年の世界ではないかと仮定できる。作者の志げは己の経験に

則り、富子と大野が汽車や連絡船や人力車を乗り継いで移動しつつ徐々に打ち解けていく過程を書き上げるための仕掛けを構築したと思われる。

続いて、富子と大野の関係性の変化について分析していきたい。

二、富子と大野
――警戒から融和へ変化する関係性――

「波瀾」の主人公である富子は、二〇歳の新妻である。一度結婚に失敗したのち、互いに再婚という形で、大野 豊と結婚をした。この作品においては具体的な父親の職業は明らかにされていないものの、中流階層に属しながらも上流に匹敵するような暮らし振りの（女中を複数雇うぐらいの生活レベルの）家庭にて育ち、妹が一人いる。東京で生まれ育ち、虎の門の女学館（東京女学館）へ通っていた。

富子の夫となった大野 豊は、長い期間海外で暮らした末に帰国し、小倉の帝国採炭会社の理事長に就任した法学博士である。富子と結婚して短期間の新婚生活を送った後、農商務省の某局長に任ぜられた。具体的な年齢についての記述は無いものの、富子とはかなり年齢差がある（大野が年長者である）ことが描写されている。

富子と夫の大野との関係性は、時間の経過とともに変化していく。ここで、順繰りに①【警戒期】、②【緩和期】、③【齟齬期】、④【接近期】、⑤【懸念期】、⑥【思慕期】、⑦【吐露期】、⑧【交歓期】、⑨【融和期】と見ていきたい。

①【警戒期】

富子は、大野に対しては一貫して好意を抱いており、小倉に向かうため新橋駅で合流する前に夫を思い浮かべる際も「優しい」「頼もしい」という形容詞を使っている。だが、実際に駅で落ち合った大野は、次のような態度であった。

（略）富子は其隙を見て少し離れた所からお辞儀をするのを、夫は一目ぢつと睨んだ丈で横を向いてしまつた。そのこはい顔が富子にはいつまでも忘れられない。その後も夫の此時の様にこはい顔をするのを見た事がない。

薄ぐらい夜汽車の中でも、大野は打ち解けなかつた。ぢつと目を瞑つて、何か考事でもして居る様だつたが、やがて手鞄から洋書を出して読み始めた。初旅の富子は余りの心細さに二言三言話し掛けた。大野は「うん」とか「さうか」とか云つた切り、直ぐ本を読み始める。昨夕婚礼して四畳半の小座敷へ一しよに這入つて今日午過曙町の門を出る迄の優しい、華やかな夫と、今の夫とは似ても似附かない、別の人の様である。富子も黙つて居るより為方がない。

このようにつれない態度の大野の前で、富子も意気消沈している。冷淡にも思える大野の振る舞いは、京都へ到着した辺りにて変化を見せる。

②【緩和期】

（略）湯から出て来て、美しう化粧した富子が、（中略）次の間から出て来たのを見て、（中略）大野は、「勇気を出してそこらを歩いて来ようか」と云つた。「は」といつて嬉しさうに微笑んだ

のは、大野がだいぶ打ち解けたのが嬉しいのと、仲人の谷田博士の夫人に昨日の朝曙町で逢つた時、「あなたね、大野さんが一しよに出ようと仰やつた時、厭だなんと仰やつては行けませんよ」と云はれたのとの為めである。

大野は富子の手を取つた。富子は真赤になつて動悸をさせた。「とうとうこんな人を生捕る様になつてしまつた、可哀相に」と、大野は笑ひながら云つた。富子は何と云つて好いのか分からないので黙つてゐる。大野は、「あ、大変な油手だ」と覚えず云ふと、富子は袖から臙脂で縁を取つた白いハンケチを出して渡さうとした。大野は「油位は恐れないよ」といつてやつぱりその儘手を引いて居た。暫く黙つて歩きながら、大野は「初めつからお前と結婚すればよかつたなあ」と云つて、富子の手を堅く握つた。

京都における大野は、口数が大分増えている。そんな夫と手を繋ぎ散歩をする富子も、真赤になったりして嬉しそうに見える。さらに大野は、「とうとうこんな人を生捕る様になつてしまつた、可哀相に」や「初めつからお前と結婚すればよかつたなあ」といった本音めいた告白を行っている。

けれども、無愛想であった夫の態度が柔らかくなって喜んだのも束の間、京都発の汽車に乗車後、二人は軽い口論をすることになる。

③【齟齬期】

（略）あくる日の午後三時五十八分京都発の汽車に乗つた。こん度は一等室も大分賑かだつた。大野の機嫌が直つたので、富子の顔は喜びで輝いて居る。

そのうち富子は棚の上から籠を卸して、蜜柑を半紙でむいて白い筋を取つて居た。大野はその手を見てかう云つた。「お嬢様の手と云ふものは綺麗なものだね。（中略）」（中略）大野は富子の渡した蜜柑を旨さうに食べながら、かう云つた。「かう遣つて、一等室に乗つて旅行して居る間は好いが、小倉の内へ行つたら（中略）今迄馴れて居る下女も居るのだから、お前はなんにも為なくつても好い。美術品だから、損ねない様に大事にして置くよ。」妻に貰つたものに子を産まなくても好いと云つたり、何んにも為なくつても好いと云ふ大野の心持が分かり兼ねたが、どうも何だか嬉しくなかつた。「わたくしなんにも出来ませんが、その内馴れませうから、どうぞお指図遊ばして」といふ富子を、生利なと云ひたさうな風で聞いた大野はかう云つた。「己は妻と下女を共通にするのは嫌だ。」

大野は、「お嬢様の手と云ふものは綺麗なものだね」「お前はなんにも為なくつても好い。美術品だから、損ねない様に大事にして置くよ」と発言し、富子を「お嬢様」「美術品」と見做している。富子にしてみれば、そういった夫の態度や言動は「どうも何だか嬉しくなかつた」。二人の間に若干のしこりが残ったまま、小倉へと到着する。

④【接近期】

大野に促される形で、富子は、大野の会社の夫人懇親会が主催する新年会へと出向く。

（略）「そんなら竹を連れて湯に行つて支度をおし。加藤の細君が迎ひに来るからね。」「馴染のない方ばかりなのですもの。あな

た一しよに入らつしやると好いと思ひますわ。」人見しりをする若い細君は一しよに行つてもらひたかつた。大野は聞かずにかう云つた。「それはその筈だがね。己は奥方様のお世話をするより、内で本を読んでゐたいね。加藤も行くしね。それに柳川小五郎と云ふ会社一の美男子が行つて居る。其男が世話をしてくれるよ。岡惚れては行けないよ。好いかい。」

（略）ドアをそつと明けて大野がはいつて来た。富子は思はず赤くなつた。（中略）

帰りに大野と富子とは歩いた。（中略）「あなた、山ノ井さんの奥様とお心安いのですつてね。遊びに来いと仰やつてよ。」「今帰り掛けにね、お目度たうと云つて奥さんがひどく背中を打つたよ。」「まあ、お気の毒ね。」「どうして。」二人は顔を見合せて笑つた。

大野が富子に「岡惚れては行けないよ。好いかい」と注意をしたり、会の途中に大野が登場しただけで富子が「思はず赤くなつた」りと、夫婦間のほのぼのとした情感が伝わる。富子の方から山ノ井総裁夫人との仲について話題にするなど、徐々に大野に対する遠慮が無くなり、二人の関係性が近しいものになってきていることが窺える。

⑤【懸念期】

距離が縮まってきたことによって、富子の中では大野に対する思い入れが一層強くなる。

大野は九日の日から事務所へ出勤した。富子は待つと云ふ事を始めて覚えたので、今迄約束をした友達なんぞを待つたのは、あれは待つと云ふものではないとまで思つた。約束通三時少し過ぎに帰つて来た大野は、嬉しさうに出迎へた富子の頬を両手で押へてキツスをした。

或る日曜日だつた。（中略）大野は居間からどなつた。「奥さんはどうしたい。今日は天気が好いから、人の来ないうちに出掛けよう。（中略）」

（中略）富子はこんな人目のない田舎を、たわいもない事を言つて歩いてゐるのが、この上もなく楽しかつた。

山の麓まで一里あまりあつた。歩きつけない富子の足の余程遅くなつてゐるのを、大野は引きずり上げる様にして山に登つた。（中略）

二人は古びた小さい祠に、白けた冬の日が一ぱい当つてゐるのを見附けて、其縁に腰を掛けた。（中略）「これから度々かういふ所へ来る積りだが、どうだい。面白くないかい。」「いゝえ。あなたの入らつしやる所なら、どこまでも参りますわ。熱心でせう。」「旨い事を言ふね」二人は笑つた。「あら。汽車が通りましたわ。」「あの汽車へ乗つて東京へ帰りたくはないかい」と大野はからかつた。富子は真面目で、「わたくし小倉が大相気に入りましたの。ちつとも帰りたくはございませんわ。それでもね、会社の用で御上京なさる時一人で入らつしやつては厭でございますよ」と云つた。

出勤の送り迎えをしたり、一緒に出掛けたりと、二人の仲は極めて良好で、それに伴い会話の量も目に見えて増えてきている。富子も、

かなり打ち解けた言葉遣いに変わってきた。だが、そのような緊張の解けた状態であっても、大野が決して答えない質問が依然として存在したままである。その懸念が、富子の心中に影を落とす。

富子は汽車の話が出る度に、大野の新橋から京都までのしぐさが不思議でならない。そこで思ひ切つてかう云つた。「あなたね、新橋から御一しよに汽車へ乗りました時ね、何か怒つて入らつしやつたの。随分澄まして入らつしやつたわね。」「あれか」と云つて大野は何か思ひ出した様だつたが、「なに、気分でも悪かつたのだらう。大分腹が透いたね。弁当を食べようか。（中略）」と話しをまぎらしてしまつた。富子にはどうも気分が悪かつた丈とは思はれなかつた。

⑥【思慕期】

大野が胸に秘めていることが気に掛かるものの、富子は、小倉での日々を重ねていく。その日常生活のそこかしこに、富子から大野への募る思いが読み取れる。

（略）富子は夕飯を一人で寂しく済まして、妹への手紙を書き始めた。富子は書いた手紙を読み返して見ると、可笑しい程夫の噂が書いてある。いつも俊雄より宜しく申出候丈より書いてよこさない妹に対して、恥かしい様にも思ふが、なぜ妹は夫の噂を書いてよこさないか、富子には分からなかつた。

（略）大野の綿入を縫ひ始めた。「お前着物が縫へるかい」大野は危ぶんだが、富子は元から紋付より外、為立屋に頼まないで、なんでも自分で縫ふのであつた。併し男物を縫ふのが大嫌で、最初縫ひ方をおぼえる為に一通り縫つた切りだつた。さて大野の着物を縫ふのは、なんとなく嬉しいので、男物とも思はずに縫つてゐるのである。富子は時計を見て、「もう十時過ぎた」と独言を言つた。夫の帰りの遅いのを気遣ふのである。夫はよく「己は芸者を見るのも厭だ」と言ふ。併し芸者の方がみんな夫を嫌ふにも限らないと思ふ。そして何故こんな事を思ふかが、自分でも不思議でならない。余程前にわづか許り一しよになつてゐた先の夫が夜泊りをした時なんぞは、格別なんとも思はなかつたのである。

右記からは、失敗に終わった前回の結婚の夫と大野とで、富子側の心情や行動が大きく異なることが窺い知れる。富子は、大野相手なら「可笑しい程夫の噂が書いてある」手紙を妹へと書き、「男物を縫ふのが大嫌」であったのに「大野の着物を縫ふのは、なんとなく嬉しい」。さらに、先の夫の外泊に対しては「格別なんとも思はなかつた」が、大野の「帰りの遅い」のは「気遣ふ」のである。それほどまで、常に夫である大野のことを考えながら暮らしている富子にとって、大野が密かに避妊を行っていた事実は、受け入れがたい裏切りであった。

⑦【吐露期】

富子の目からは冷たい涙が翻れた。どんな女が男を思ふのでも、自分が大野を懐しく思ふより以上に思ひ様はあるまいと思ふ程、自分は夫を慕つてゐる。かう迄に自分のなつたのは、半ばは夫の手に載せられてかうなつた様に思はれる。夫は慥に優しくしてくれる。可哀がつてくれる。併し夫のは可哀いから可哀がるのではなくつて、義務で可哀がるのではあるまいか。共浮かれのうかうかと罪もなく喜ばせられてゐる時、ふと夫は自分をおもちや

にする、一時の慰みにするといふ風に思はれることがある。（中略）これでは全く自分は死の宣告を受けたに等しい。併し此体を無駄なものにしてしまふのは厭だ。自然に背いた事をしてゐるのは恐ろしい。こつちでは一日も大野なしには生きてゐられないやうに思つてゐるのに、大野が平気でこんな事をしてゐるのは余り残酷だ、情ない男らしくもないと富子は思つたのである。

「どんな女が男を思ふのでも、自分が大野を懐しく思ふより以上に思ひ様はあるまいと思ふ程」慕っている自分に対し、「死の宣告」をするような夫は、「余り残酷だ、情ない男らしくもない」と憤る富子は、大野と一切顔を合わせず口も利かないという強硬手段に出る。大野は、冷静に話を聞き出したうえで自身の率直な思いを告げ、意見交換をし、「お前がさう思ふなら、もう余計な遠慮はしないから」と述べて、事態は一応の決着を見る。

⑧【交歓期】

仲直りをした大野夫妻は、三月初旬の「或る日曜日に急に思ひ立つて」大宰府に詣でて、帰る途上にて思いがけず加納 元行という地元名士の豪邸に泊まることになった。

主人はさぞお疲れだらうからと云つてすぐ二階の一間へ案内した。八畳の座敷に紫の友禅縮緬の対の布団が敷いてある。（中略）大野はかう云つた。「おやおや。婚礼の晩の様だ。ここの若い奥さんに気の毒だね。」「全くね。」「夫婦連で来て泊られては、昔の事を思ひ出すだらう。」「わたし達なんか羨ましがる価値はありませんわ。」「己が冷淡だからかい。」「どうですか。」

（略）富子は雨戸を締めて座敷へ這入つて来た。「あら、その儘お休みになつては行けませんわ」と云つて、富子は長襦袢ばかりになつて、自分の下着を大野に借した。髭を生やして、緋の山繭縮緬の胴抜の袖のぶらぶらしたのをお引き摩りに着たのを見て、富子は面白さうに笑つてゐる。「厭な奴だね。自分で被せて置いて失敬な。おい。泊まるのは厭だと思つたが、かうなると悪くもないね。」

加納邸における大野夫妻は、未知の場所で予想外の展開という状況でありながらも、非常に打ち解けた様子で話している。徐々に互いの人柄や性格を理解してきた二人は、冗談や軽口を遠慮無く言い合える間柄になっていることがわかる。

⑨【融和期】

そして三月中旬になり、大野の帰京が決定され、汽車に乗り東京へ戻ろうとする最後の場面になって、遂に富子は、長く気掛かりだった件について改めて大野に尋ねてみる。大野は、今度こそ誤魔化すこと無く本音を語った。

（略）薄暗い汽車の内で夫と差向ひになつたので、新橋から京都迄の夫の怪しいそぶりを富子は又思ひ出した。「変な事を申す様でございますが、新橋を御一しよに立ちました時のあなたの御様子が、どうも汽車を見ますと思ひ出されまして気になりますの。ほんとになんでもなかつたのでせうか。（中略）」「あれか。話してもなんにもならないと思つたから、黙つてゐたが、実は気に掛けた事があつたのだ」と、大野は話し出した。（中略）大野

は話の途中で「林檎でも食はせないか」と云つた。富子はナイフを出して林檎をむきながら云つた。「続きを早く仰やいよ。」「小説でも聞く気になつてゐる。おいおいそんなに皮を厚くむいては食べる所はなくなるよ。」「まあ大げさな事を仰やる方ね。林檎をこんな風にむくのはハイカラアではないでせう」と一つに続いた皮をナイフの尖へ附けて見せびらかした。

「気に掛けた事」の中身をなかなか言わない夫に焦れ、「続きを早く仰やいよ」と言い、林檎の皮の剝き方に注意を付ける夫に「まあ大げさな事を仰やる方ね。林檎をこんな風にむくのはハイカラアではないでせう」と返答して「一つに続いた皮をナイフの尖へ附けて見せびらかした」富子は屈託が無い。ここに至り、富子は伸び伸びした自分の姿を取り戻すことができたのである。

大野は、「気に掛けた事」を二点説明する。一つ目は、「フランスで友達になつたゴオチエエ」からの手紙に「東洋人染みた顔立」で「お前位の年恰好な人」だった妻が姦通して離婚した事実が書かれていたこと。そして二つ目は、無二の親友の古川から、「いつなんどき倶利加羅紋々の兄いに出刃庖丁を持つてあばれ込まれるか分からない様な妻を持つてゐるのも一興だらう」と言われたこと。そのうえで二人は、次のような会話をする。

「（略）一体あの男の話は不断から頭もしつぽもないことがあるが、聞き直すのも、がう腹だつたから、黙つて別れた。」富子は意地の強い夫の思ひさうな事だと思つて聞いてゐる。

「兎に角どんな様子な女かためして見ようと思つたのだ。併し己が多少神経を傷めたのは、ほんの僅かの間だつた。間もなくお前がお目出たいお嬢様だといふ事が分つたのだよ。おいどの辺からのろい男になつたか覚えてゐるかい。」「京都ではあんまりおこつて入らつしやらなかつた様ね。」

富子は、黙って話を聞きながらも「意地の強い夫の思ひさうな事だ」と考えたり、「京都ではあんまりおこつて入らつしやらなかつた様ね」と返答したりと、既に夫を理解している様子が窺える。対する大野も、「お前がお目出たいお嬢様だといふ事が分つた」と述べて、妻の性格を把握できたことが読み取れる。このように二人は、唯一のわだかまりも解消し、新たに融和的な関係を築いていくのである。

ここまで見てきたように、富子と大野とは、①【警戒期】、②【緩和期】、③【齟齬期】、④【接近期】、⑤【懸念期】、⑥【思慕期】、⑦【吐露期】、⑧【交歓期】と過程を経て、⑨【融和期】へと到達した。互いのことが良くわからない初期状況において、大野は「兎に角どんな様子な女かためして見よう」と慎重に応じたが、正直な富子は何の計画も裏表も無く、都度自らの思いに従い行動や発言をしてきた。ただし打ち解けられない段階では、富子も些か緊張していた。

そうした富子の正直さに触れ、大野が態度を改めるようになり、富子も、初期の緊張や遠慮を克服して夫に自らの思いや懸念を吐露し、二人の距離や関係は近付くこととなった。富子は大野の性質を理解し、大野もまた、富子の性格を把握するようになった。その結果富子は、大野の前で本来の姿である天真爛漫を遺憾無く発揮できるようになったのである。

三、生家の家族
――優しい父母と分身のような妹――

富子と大野の関係性の変化について分析してきたが、続いて富子の生家の家族について確認しておく。生家の家族を調べることにより、結婚前の富子の状況等が分析できるからである。

まず、父母について見ていきたい。母については、「敬愛」という語が相応しい、親しみの中にも尊敬の念を滲ませた態度にて接している。

（略）嬉しさうに眺めてゐた母あさんはかう云つた。「好くお似合だよ富さん、ここからすぐ新橋へ行くのでせうね。（中略）」（中略）「は、六時三十五分迄に新橋迄ここから行けば好い様になつてゐますの。（略）」

（略）「ねえ、富さん。大野さんが優しさうなのでね、わたしもよつぽど安心して居られますよ。誠に落ち着いたえらさうな人だからね、好く指図を聞いてね。」母あさんのお声は曇つて来る。頼もしい夫の噂でも、かうなつて来ると悲しい許で、段々と下を向くやうになる。

二度目の結婚生活に入る娘を心配する母と、病身の母を気遣う娘の様子が窺える。また、父の記述は母以上に少ないが、次に抜粋する。

年始客を送り出したお父うさんは、母あさんの部屋へ這入つて来られた。「おう、富子か。ここから立つのか。早く支度せにやいかん。（中略）」（中略）「うん頭が変つたな。」お父うさんは初めて気が附かれた。「大野のお祖母あ様のお好みださうでございます」と、母あさんの云ふのを聞いて、「さうか、それが好い、近頃の孔雀の羽をひろげた様な頭はいかんからな。」いつにないお父うさんが髪の事なんぞを云はれるので富子も友子も思はず笑つた。

遠くへ嫁いで行く直前の生家の家族揃っての食事で、少ししんみりとしているところに、「近頃の孔雀の羽をひろげた様な頭はいかん」と髪の話題を持ち出した父は鷹揚な性格なのだろうが、それ以上に、場の雰囲気を和ませようとする優しい意図が働いていたように思える。父は、母同様、優しく富子を見守っている。

次に、妹の友子についてだが、「友子（ともこ／ＴＯＭＯＫＯ）」は、「富子（とみこ／ＴＯＭＩＫＯ）」と大変良く似た名前を与えられている。富子にとって、友子は唯一の妹であり、軽口を叩き合うこともできるような心安い相手である。

（略）「まあ厭だ。丸髷に結つて。おかまのところへ寄つて入らつしやつたの。曙町の髪ではないわね。好い形よ。」友子は十日許前に法学士を養子にして婚礼したのである。（中略）「厭に曙町を侮辱する方ね。今おかまのところへ寄つて、やうやうの事で丸髷が出来上がつたのよ。（略）」

「母あさんの御病気を見ると、立ちたくない事ね。」「お姉え様、大丈夫よ。わたし達が附いて居るから安心してお立になつて頂戴。」「まあ、わたし達だつて。丸髷に結ふのよりよつぽど勇気があるわね。」「そんなわけではなくつてよ。お父うさんとわたしの

事をいつたのではありませんか。」十九の妹は真面目な顔をしていひわけをする。

仲良しの年子の姉妹は、結婚に関してもたった一〇日ほどの違いで婚礼を行っている。そして、遂に出立という場面においても、富子と友子との姉妹は揃いの衣装に身を包み、無言で会話ができるほど心を通じ合わせている。

（略）同じコオトに真白な駝鳥のボアを領に巻いた富子と友子とは、手を引かれて大野の跡に付いた。（中略）汽車が動き出した。富子友子のきやうだいの目はぴつたり合つた。病身の母親の上を頼む富子と、それを受け合つた友子とは無言の中に意を通じたのである。

以上のように、生家における富子は、優しい父母の愛情に包まれ、唯一の妹とは、分身のように似て強く結び付き合っていた。二度目の結婚をした富子は、そうした非常に居心地の良い空間を離れ、新たに「大野」という未知の存在との暮らしを始めたのである。

四、再び作品の構成
――場面と関係性との変化の連動――

ここで再度、「波瀾」という作品の構成について分析してみたい。この作品は、富子と大野という主要人物を中心にして、場面が東京の赤坂新町の髪結から、青山の実家、新橋駅、寝台附の一等室、京都の俵屋、新京極、京都駅、寝台附の一等室、（神戸駅）、馬関駅、連絡船、門司港、門司駅、小倉駅、旭町に近い借家と変化していく。小倉の住居に移ってからは、湯屋、偕行社、事務所、山、三樹亭、北山邸、山ノ井邸等に出向いているが、基本的には借家を中心とした小規模な範囲の移動に止まっている。また二人の距離が縮まってからは、若干遠出をして太宰府、加納邸へ移動している。そして最後は、小倉駅を出発し、門司駅を経て夜行列車へと乗車し、二人きりの車内で会話する場面で終わる。こうした場所と状況の変化に、大野と富子の関係性の変化を合わせて、時期ごとにどのような変遷を辿ってきたのかを確認する。

富子の方は、同居前から大野に対して好印象を抱いていたが、新橋駅で合流した夫は「こはい顔」で「ぢつと睨ん」できた。富子は困惑しつつ「心細さに二言三言話し掛け」てみるが、「大野は『うん』とか『さうか』とか云つた切り、直ぐ本を読み始める」有様だ。

この①【警戒期】の二人は、「新橋のステエシヨン」から「寝台附の一等室」へ乗り込む。夫の赴任先である小倉での新婚生活を始めるため、駅で待ち合わせをしたのである。実家を遠く離れたうえ再婚に臨む不安な富子にしてみれば、肝心の夫がこの態度では、以後の旅が思い遣られたであろう。

冷たい夫の様子が変化したのは、京都へ着いてからである。空間が動くとともに警戒を解いた大野は、富子に優しくなる。京都の俵屋に宿泊した二人は②【緩和期】へ入り、「勇気を出してそこらを歩いて」みることにする。汽車においては向かい合わせで座っており、寝台も上下で分かれて寝ていたが、京都では手をつないで散歩をするまでになった。列車から地上へ途中下車して徒歩での移動となり、身体的な距離が縮まると同時に、心理的な距離もまた近付いたということが理解できる。

だが、京都発の汽車に乗車後、「神戸から一等室へ這入つて来た男」である村井 源蔵が二人の間へ割って入る。夜が更け村井も含め乗客が寝静まり、ようやく二人になれた局面で雨が降り出す。大野は富子の剥いた蜜柑を美味しそうに食べ饒舌だが、二人の思いはすれ違い、軽い口論になる。この③【齟齬期】の二人は「汽車」という状況は同じでも、①【警戒期】とは異なり、手ずから剥いた果実を差し出し、それを抵抗無く口に入れられるほどに身体と心理の距離は縮まっている。それゆえ、そのうえで浮き出た価値観の差を不本意に感じるのである。大野は異議を唱える妻に「生利」という視線を向け、富子は己を「損ねない様に大事にして置く」と述べる大野に疑問と違和感を抱く。最終目的地である小倉へ到着するため、汽車や船を次々に乗り継ぐ中で、時に大野に手を引かれて笑い合いながらも、富子の胸にはわだかまりが残り続けるのである。

長い旅路の果てに、二人はようやく小倉の借家へと辿り着く。少し気掛かりはありながらも、富子と大野とは互いを思い遣る中で徐々に距離を縮めていく。大野は、それまでの旅の途上では無く自分自身の暮らすフィールドへと富子を招き入れ、共同生活を開始した。独身の時とは、生活習慣や心持など多くの面で勝手が違ったと予想できるが、大野は富子のためにさまざまな気遣いを見せる。会社の夫人懇親会の新年会へと出向くよう手配し、地主の娘である八重や寧國寺など己の懇意の人脈に引き合わせ、妻が小倉という未知の場所に馴染めるよう配慮を重ねる。また、富子の父の知人であり富子が昔から親しむ戸川に対しても、礼儀正しく対応する。そういった大野の姿勢を見て富子も大野に親近感を抱くようになり、打ち解けた物言いに変わっている。移動続きの①～③を経て、④【接近期】において初めて二人は住居に腰を据えることができ、身体的・心理的距離を縮めていったのである。

ところが、大野との距離が近くなればなるほど、富子は旅の初めにおける彼の態度を不可解に思うようになる。仲が深まった一つの証のように誘われて出掛けた先の山で、汽車を見下ろしながら思い切って尋ねてみるが、はぐらかされてしまう。「山」という、普段いる借家とは異なり女中も書記も不在で完全に二人きりの空間にも関わらず、本当のことを教えてくれない曖昧な夫に対して、富子は不安や懸念を募らせていく。これが⑤【懸念期】である。

⑤のような不安や懸念が出てくるというのは、富子の大野に対する関心や執着の度合が高まっている証左でもある。夫への思いが募ってきた富子は、妹への手紙を書く時も夫の着物を縫う時も、彼のことが頭から離れない。夫に夢中なため、社交として出向いた知人宅でも、結局は大野のことばかり考えてしまう。北山邸では、赤ん坊を見つつ「夫が子供を生むのは好し悪しだと云つた事」を思い出し、山ノ井邸では、夫と「同名異人」の「大野と云ふお医者」に会いながら「自分の夫は（中略）色つやの好い、広々とした額の清げな、優しい目附の情の深さうな、きつと締つた口元で笑ふと揃つた美しい歯の見える、男らしい、貴夫人に好かれさうな、立派な男」だと思う。独特な形で自身の夫をしつこく描写するこのくだりからは、富子の大野に対する思慕の強さや深さが感じられる。この⑥【思慕期】においては、大野からの富子への愛着も感じられる。帰宅を待っていた富子に「寂しかつたらう」と言葉を掛け、北山邸へ富子を迎えに来て相合傘で帰っている。しかし、そうした夫の温かな愛情を受け取りながらも、富子は激しい思いを募らせていく。

大野は誰に対しても親切に接する人物で、山ノ井総裁夫人の頼れる相談相手であったり、寧國寺には外国語の良き教師であったりする。

大野を愛し始めた富子にとって、夫の親切振りは、己のみを特別扱いしてくれない不満と常に背中合わせであり、優しい言葉を掛けられたとしても「これは誰にでも云ふ事らしい」と素直には受け取ることができない。大野の親切な言動は誰に対しても同様であり、再婚に際し不安な富子にとっては、それのみでは特別な愛を感じることはできず満たされない。よって大野が他人にも親切に振舞う度、富子は神経を尖らせていくのである。

以上のような積もり積もった思いが、一気に爆発したのが⑦【吐露期】である。夫婦の寝室を掃除しようとして避妊の痕跡を発見したと思われる富子は、涙を流して寝込んで、帰宅した夫との対面や会話を頑なに拒み続ける。「どんな女が男を思ふのでも、自分が大野を懐しく思ふより以上に思ひ様はあるまいと思ふ程」慕う己に対して余りに残酷で不誠実だと憤る富子に、大野も初めて自分の胸の内を明かす。借家のみを舞台として展開されるこの期において、遂に二人は真正面から向き合ったのである。そして「もう余計な遠慮はしない」という大野の一言によって、事態は収束を迎える。

続く⑧【交歓期】で、いつもの借家から大宰府へ出掛けているが、ここまでの遠出は、小倉に住んでから初めてのことである。さらに、参詣の帰途を待ち受けていた男により、加納邸にまで連れて来られる。これは全く予期していなかった事態ではあったが、①～⑦を通じて徐々に関係性を深めてきた二人は、柔軟に受け入れて面白がることができている。通常暮らしている借家という空間を離れた場において、観光や接待という新しい体験を味わう。未知の人間に囲まれた未知の場所で、ついこの間まで他人であった互いの存在が、今や誰よりも親しく心強く感じられる。安心して気楽に話す富子に対して、大野も砕けた態度で共鳴を見せている。二人の打ち解けた雰囲気が印象的である。

最後の⑨【融和期】には、二人は小倉から東京へ戻ることになる。別れを惜しみ「客が狭い家へ一ぱい」訪問する。富子も「会社の役人の奥さん方に一通りお馴染みになつて」いたが、「今は皆お暇乞をしなくてはならない」。いよいよ「小倉発の汽車で出立する事」になり、門司駅からは汽車の中で二人きりになる。「駅から汽車内」で「二人きり」という状況は、①【警戒期】と全く同様であるが、①の時は、冷淡な大野の態度に困惑して遠慮がちであった富子が、⑨に至ると、親密で打ち解けた雰囲気で接してくる大野に対し、解放されたように正直な言動を取っている。遂に富子は長く気掛かりであった最初の頃の態度について改めて大野に尋ね、夫も今度こそ誤魔化さず本音を語る。大野は話の途中で「林檎でも食はせないか」と言い、「富子はナイフを出して林檎をむきながら」続きを責付く。③【齟齬期】でも富子が剥いた蜜柑を大野が食べる場面が登場したが、ここでは一層遠慮無いやり取りが展開しており、二人の関係が深化したことが窺える。以前は沈黙が支配していた汽車の中、延々繰り広げられる富子と大野の会話で物語は締め括られる。「おいどの辺からのろい男になつたか覚えてゐるかい」「京都ではあんまりおこつて入らつしやらなかつた様ね」という場面で幕が下りるが、恐らくこの後も東京に到着するまで、二人の間では数え切れないほどの会話が続いていくのであろう。

ここで、関係性を区切った時期ごとに二人の様子をまとめる。

時期	場所	状況	大野	富子
①【警戒期】	新橋駅→寝台車	駅→汽車内	冷淡	困惑・遠慮
②【緩和期】	京都	旅館、街中	柔和	含羞・感激
③【齟齬期】	京都駅→寝台車→	駅→汽車内→		

（神戸駅）→馬関駅→連絡船→門司港→門司駅→小倉駅　駅→船→港→駅→汽車内→駅　不興　懐疑・異議

④【接近期】借家→湯屋→偕行社　住居→湯→集会所　配慮　親近感

⑤【懸念期】借家→（事務所）→山　住居→（職場）→山　曖昧　不安・懸念

⑥【思慕期】借家→（三樹亭）→北山邸→山ノ井邸　住居→社交　愛着　夢中・思慕

⑦【吐露期】借家　住居　開示　憤激・吐露

⑧【交歓期】借家→太宰府→加納邸　住居→観光→接待　共鳴　安心・気楽

⑨【融和期】小倉駅→門司駅→寝台車　駅→汽車内　親密　解放・正直

東京から京都を経て小倉へ向かい、辿り着いた小倉において生活を営む過程で打ち解け、再び東京へ戻っていく作品の構造になっていることが理解できる。場所や状況の移行に伴い、大野と富子の関係性もまた変化していった。この「波瀾」という作品は、その経過を丹念に描写しようと試みている。

五、作品の流れ
――自己開示と相互理解の物語――

「波瀾」というのは、富子が大野と、自己開示をして相互に理解を深めていく物語であると言える。

富子は、生家で理解と包容力のある両親、自らの分身のような妹と過ごしていたため、他者に自分自身を開示して理解を求める必要は無かった。また前回の結婚生活においては、他者である夫と、相互に自己を開示して理解し合うことができないままで終わった。その原因については、別の作品である「あだ花」の分析に譲りたい。

結果として富子は、今回の大野との結婚において、生まれて初めて他者への自己開示と相互理解に挑んだこととなる。それは富子には、「波瀾」ではなかったであろうか。「波瀾」という語には、「大小の波」という意味の他、「文章に、起伏や変化があること」及び「人物の心の機微」といった意味がある。[7] この「波瀾」において、「文章に、起伏や変化がある」とは言い難い。しかしながら、「人物の心の機微」については、極めて丁寧に書き込まれていると言える。

つまり富子は、夫を愛したことにより、「夫に愛してほしい、夫のことを深く知りたい、隠し事をしないでほしい」と、生まれて初めて感じながら苦しんだのではないだろうか。富子は、従前に生きてきた世界では味わうことの無かった「波瀾」に呑まれたのである。

富子は物語の最初から最後まで一貫して正直だが、天真爛漫振りは途中で影を潜めて大人しくなる。まだ良く知らない大野に嫌われたくないという思いがそうさせたのであろう。だが、徐々に天真爛漫さも発揮して、感じていることを明確に告げるようになっていく。

同時に大野も、最初は慎重に警戒をしており、非常に口数が少なく本音を明かさないが、徐々に饒舌になっていく。大野も最初から最後まで、変わらずに優しく親切だが、次第に理屈っぽい姿をも隠さないようになっていく。そして最後は、富子に内に秘めてきた心情を告白している。

富子と大野の変化は自己開示と相互理解が進んだ証拠であり、最終

場面における二人の台詞は、その最たる象徴と言える。大野は自分の手の内を晒したうえ本音を明かし、富子も「京都ではあんまりおこつて入らつしやらなかつた様ね」と、気付いたことを正直に告げる。東京へ進んでいく汽車同様に、二人の会話や関係性も連綿と続いていくことが予測できる。「波瀾」という自己開示と相互理解の物語が、この会話の場面で終了するのは尤も至極と言えるだろう。

六、現実世界との比較
――登場人物への実在人物の投影――

ここで「波瀾」という作品の世界を、森 志げが生きた現実の世界と照合してみたい。志げが夫である鷗外と再婚したのは、既出の通り一九〇二（明治三五）年一月のことである。二人とも一度目の結婚に失敗した後の二度目の結婚であった。当時小倉にいた鷗外が上京して観潮楼で結婚してから、連れ立って旅立ち、途上にて京都における滞在を挟み、小倉の借家へ至っている。京都での宿泊先が俵屋であることも含め、志げと鷗外の旅程は富子と大野のものと殆ど同じと思われる。[8]

次に、「波瀾」の登場人物を、現実世界の人物たちと比較してみる。「波瀾」の登場人物たちには、各々モデルと思しき実在の人物たちが存在する。下記のように、対照表を作成した。

対照表を比較すればわかるように、「波瀾」の主要な人物たちには、ほぼ同様の履歴や肩書を持つ実在の人物が存在している。主人公富子及びその生家には、志げ及び荒木家の人々が該当して、夫の大野及びその実家には、鷗外及び森家の人々が合致する。

また、小倉にて出会う「八重ちゃん」「綾ちゃん」「寧國寺さん」と

「波瀾」の登場人物と実在人物の対照表

登場人物名	富子との関係	実在人物名	森 志げとの関係	生い立ち・肩書など
大野 富子	本人（主人公）	森 志げ	本人	森 鷗外の妻、小説家
大野 豊	夫	森 鷗外	夫	小説家
お父うさん	父	荒木 博臣	父	大審院判事
母あさん	母	荒木 阿佐	母	荒木 博臣の妻
友子	妹	山口 栄子	妹	山口 善六の妻
俊雄	義弟	山口 善六	義弟	法学士
お祖母あ様	義祖母	森 清子（於清）	義祖母	木嶋 又右衛門の次女
大野 精二郎	義弟	森 篤次郎	義弟	筆名「三木 竹二」／劇評家、医師
精二郎の細君	義弟の妻	森 久子	義弟の妻	筆名「白井真如」／判事の娘
八重ちゃん	大家の娘	八重	大家の娘	小倉時代に親しんだ娘／盲目
綾ちゃん	大家の娘	あや子	大家の娘	小倉時代に親しんだ娘
寧國寺さん	夫の友人	玉水 俊虡	夫の友人	曹洞宗安国寺の第二七代住職
古川	夫の友人	賀古 鶴所	夫の友人	浜松藩医の息子、医師

いった人たちにも、実際に鷗外が知り合った現地モデルが存在する。さらに最終盤で僅かに登場するだけでありながら、強烈な印象を残す「大野とは無二の親友」の「古川」は、鷗外の親友だった賀古 鶴所が

モデルである。彼等彼女等は、実在の人物と完全に同名あるいは良く似た名を与えられており（父と母、義祖母のように名前が示されない場合もあるが）、ほぼ同一のプロフィールを持つ[9]。

右記のように、志げが「波瀾」という物語を書き上げる際、現実の世界に多くの素材を求めたことは間違いない。「波瀾」に登場する人物及び出来事は、大部分が事実と等しいと考えられる。

七、事実と異なる点
――作家としての心意気と創造空間――

現実と似た状況で、実在の人物と良く似た登場人物が現れる一方、「波瀾」には事実と異なる点も多く存在している。それらに関して、順に確認したい。

まず、富子の夫の大野に関する事柄を確認したい。大野のモデルは鷗外であるが、大野の職業は、鷗外とは異なっている。鷗外の職業は多岐にわたっており、小説家・評論家・翻訳家・教育者・軍医などが挙げられる。対する大野は法学博士で、長い期間海外で生活した末に帰国して小倉の帝国採炭会社の理事長になったという人物である。鷗外も医学、文学の両博士の称号を得たが、法学の学位は手に入れていない。また外国に滞在した経験は共通するものの、その結果として就いた職業が大きく違っている。鷗外は軍医でありながら小説や評論や翻訳を手掛ける文学者であったが、大野は会社という営利組織に籍を置いている。さらに大野は小倉での新婚生活の後に農商務省某局長に就任することとなったが、こちらも鷗外の専門とは性質を異にしている。

加えて大野の人生の軌跡にも、鷗外との相違が見られる。大野は、幼少時に両親と死に別れた設定になっている。しかし鷗外は、志げと再婚した折父の静男（静泰）は既に亡くなっていたものの、母である峰子は存命であった。のみならず、その峰子は結果として一九一六（大正五）年三月二八日まで生きた（享年七〇歳）。そして大野も鷗外同様、富子との再婚前に一度結婚しているのだが、元妻が産んだのは女の子一人で、しかも離婚後間も無く亡くなったことになっている。現実は、鷗外の元妻の赤松 登志子が産んだのは男の子一人で、その森於菟は、七七歳まで生きた。

次に、主人公富子自身の設定に着目する。富子の実家は「青山」となっているが、これは当時では東京市赤坂区の一地区に該当する。他方、実際の志げの実家は、東京市芝区西久保明船町に存在し、いずれも現在では東京都港区に当たる近距離ではあるものの、少々変更されている。

加えて、富子の出身校にも違いがある。本文には次のような文章がある。「富子は虎の門の女学館に、北山の奥さんは麹町の華族女学校に通ふので、溜池の芝居小屋のある所あたりで毎朝時刻違はず逢つたが、学校の違つてゐる二人は、目礼もしたことがなかつたのだ」とあるが、「虎の門の女学館」というのは東京女学館のことである。だが志げが実際に通ったのは「虎の門の女学館」（東京女学館）ではなく、「北山の奥さん」が通ったと設定されている「麹町の華族女学校」（学習院女学部）の方なのである。

ここで華族女学校と東京女学館の違いについて、少し考えてみる。華族女学校は、皇族・華族女子の教育を目的に設置された宮内省所管の学校で、一八八五（明治一八）年に華族女学校として開学し、一九〇六（明治三九）年に学習院と併合されて学習院女学部へと改称された。一方の東京女学館は、華族女学校に遅れること三年後の一八八八

（明治二一）年、伊藤 博文をはじめとした政財官の各界の有力者を創立委員として女子教育奨励会を母体に開設された。つまり、女子の教育機関である点は同じであっても、華族女学校は官立（国立）で、東京女学館は私立であった。また華族女学校が「貴族の子弟」のみを入学対象としていたのに対し、東京女学館の方は（実際は富裕層の子女が多かったものの）広く門戸を開放していた。一八九一（明治二四）年刊行の『官私立学校案内』では、華族女学校は「宮内省ノ所轄ニ属シ貴族ノ子弟ニ相当ノ教育ヲ与フル所ナリ」と簡潔に書かれ、東京女学館は「貴顕紳士ノ設立にカヽル女子奨励会ニ属シ遠ク英京ロンドン等ヨリ学位アリテ交際ニ巧ナル貴婦人ヲ教師ニ聘シ専ラ欧洲ノ交際法ヲ我国ニ応用シ真正ノ文化風ノ淑夫人ヲ養成ス」と記されており[10]、近代化に伴い官立（国立）教育機関として半ば自動的に立ち上がった華族女学校と、志を持つ仲間により設立された私立の東京女学館との差が浮き彫りになっている。志げは富子を形象化する際に、自らが通った華族女学校ではなく東京女学館の方を通学先として選択したのである。

さて大野と富子に関する事実と異なる点を整理したうえで、以上のような設定変更がなぜ行われたのかについて考察したい。前提として「せっかく作品を創作するのであれば、現実とは異なる世界をつくりたい」という志げの意欲が存在していたと思われる。志げは鷗外との結婚前から、物語や小説を好んで読んでいた。一度結婚に失敗しつつ鷗外と再婚しようと思えたのも、一つには、従前より鷗外の作品及び登場人物を好ましく感じていたからである[11]。ただし、あくまでも読者側から楽しんでいた。それが思わぬことから、自身で筆を執ることになって、改めて小説を書く意義を彼女なりに考えたと思われる。そのうえで「作品を生み出すのであれば、自分のいる現実とは、少し違う世界をつくり出してみたい」と決意して実行してみた。身近な素材を取り入れつつ、あくまでも作品をフィクションとして完成させようとする、作家としての志げの心意気が、そこからは感じられるように思う。

そして、現実とは少し異なる理想の世界を描こうと試みたのではないか。既出の通り、大野は幼少時に両親と死に別れ、元妻が出産した女児も既に亡くなった設定になっている。つまり富子にとっては、舅も姑も、そして義理の子さえも存在していない。言葉を濁さず率直に言えば、それは志げにとって悩みの種となる存在が全て消え失せた、ある意味では理想的な世界である。「波瀾」の世界の富子であれば、小倉での二人の生活を終え東京へ戻ったとしても、それ以後もほぼ同じような生活を続けられる。最後の会話からは、未来の生活への希望や期待を感じる。

つまり「富子と大野との自己開示と相互理解の物語」という主題を描き切るために、二人が互いのみを見つめ合い向き合うような構成をつくり上げる目的で、敢えて志げは実生活と少々違う世界を創造したと考えられる。舅姑や義理の子といった雑音を予め取り除き、主演の二人が伴侶と相対するしかない状況を生み出すことで、「自己開示と相互理解の物語」という主題の純度や透明度を上げることを試みたのではないか。

以上のように、志げは基本的には自らの現実に基づきながらも、いくらかの変更を加味して事実とは異なった創造空間を生み出したのである。

八、志げが描きたかったテーマ
――二人きりの夫婦の姿――

既に良く世間にも知られているように、作家森 志げの誕生には「半日」という鷗外による作品が大きく関わっている。「半日」は、一九〇九（明治四二）年三月「スバル」第一年第三号に発表された。文科大学教授高山博士の、ある半日を描写した小説であるが、大半が博士の妻と母、つまり嫁と姑の確執に占められ、これが原因で志げは世に悪妻として知られる羽目になってしまった。[12] 怒りに燃える妻に対し、鷗外は彼女自身も小説を書き発表することを提案し、事実同年の一一月に志げは作家デビューすることとなった。

ただし、一作目の「写真」は、ごく短い短編小説であった。志げはまだ「小説を書く」という行為には不慣れで、未知の挑戦であったため、文壇デビュー作ではあるが「習作」とも呼ぶべき立ち位置となった。

そういった意味においては、二作目の「波瀾」こそ、真の意味でのデビュー作と言える。志げは、一定の文章量を持つ中編小説を初めて書き上げられた。「波瀾」は、全作品中二番目の長さを誇る物語である。

鷗外が志げに小説の創作を勧めた背景には、「心理的療法の手段」にしようとした意図が指摘されているが、志げが鷗外の誘いに乗る形で執筆活動を始めたのは、何も鷗外の指示に従順な妻であったというわけではないであろう。志げには志げなりの思いがあり、未知の創作活動へ着手したのである。

一九〇九（明治四二）年一一月から一九一〇（明治四三）年三月にかけ、志げは雑誌「スバル」に「写真」「波瀾」「あだ花」「旅帰」「猩紅熱」と次々に作品を発表する。これは「執筆の開始期」に当たり、ちょうど三〇歳の志げが、自身の学生時代から初婚、再婚、子育て、子どもの病気といった近過去を振り返って執筆している時期である。主人公は一〇代の学生から二〇代の主婦で、現実の志げと非常に似た履歴を持つ女性たちである。

「写真」で学生時代の無垢な思い出を書いた後、志げが題材として選んだのは、自身の人生において最も印象的かつ大切であった再婚と新婚生活についてであった。次女の杏奴は、『晩年の父』で「結婚後、二人は直に父の任地である九州の小倉に出発して、其処で半年ほどの楽しい月日を過した。母の何時も私に話して聞かせる、一生で一番楽しかった時、で、全く色々な点で恵まれぬ境遇にあった母の、一生を通じての幸福な思出の生活であったろう」と述べている。[13] また、杏奴以外の子女たちも、同様のことを記している。[14]

主役に作者である志げと良く似た富子を据えた〈富子もの〉作品は、全部で六作品存在し、全二四作品中の六作品と四分の一を占めている。志げの連作としては、この他にも主役が八重子という女性の〈八重子もの〉があるが二作品のみであり、やはり〈富子もの〉が志げ作品における最大で最重要な作品群であることは間違いない。執筆順と作品内での時間の流れは一致しておらず、作品の世界を時系列で並べると、①「記念」（執筆順⑥）：幼少：誕生～七歳、②「あだ花」（執筆順②）：初婚：一〇代、③「波瀾」（執筆順①）：再婚（新婚）：二〇歳、④「産」（執筆順④）：初産：二〇歳、⑤「友達の結婚、パツクの大臣、流産」（執筆順③）：流産：若年層、⑥「ぼつちやん」（執筆順⑤）：男の子の出産：若年層、となる。「波瀾」は〈富子もの〉一作目という意味でも重要である。

執筆順としては、まず最も印象的であった再婚と新婚生活について

書き（「波瀾」）、次に初婚を回顧し（「あだ花」）、現状に近い生活を書き（「友達の結婚、パツクの大臣、流産」）、「最初の出産」について執筆し（「産」）、続いて「男の子の出産」を執筆してから（「ぽつちゃん」）、最後に幼少期という原点へ戻った（「記念」）。「記念」「あだ花」では、父母や友子（妹）や且之助（伯父）等に頼ることの多かった富子が、再婚を機に自分自身の家族を産み育んでいく姿が、流産などの経験も含め描かれている。「波瀾」を分岐点として、富子の人間的・心理的な成長が見受けられるようになる。

世間に知られた作家である鷗外が自らの視点から描いた「半日」に対して、志げは「波瀾」を通して、自分自身の目に映った新婚生活の様子を克明に記述した。しかし、「半日」という作品に対して激しく憤り抗議した割に、出来上がった作品自体は意外なほどに平穏で事件らしい事件も特に起こらず、素朴で純粋な心の機微が描かれている。

既に見てきたように、「波瀾」というのは、富子が大野と心を開き相互に理解を深めていく過程を丁寧に辿った作品である。初婚に失敗してしまい不安な想いで再婚する富子が、本来の天真爛漫を覆うほど神経質になりながら、夫の大野との新生活において生じたさまざまな感情を書き綴っている。

志げがこの作品で描きたかったテーマは、「自己開示と相互理解を重ねる二人きりの夫婦の姿」である。志げは小説という形式に則り、己の感情を整理し、未知の存在だった夫をどのように知ろうと努力し、同時に自身を知ってもらったのかを記しておきたかったのではないか。この小説は、志げの奮闘の記録であるとともに、彼女が夫へと捧げた紛う方無き愛の証明なのである。

おわりに
――「半日」への異論としての「波瀾」――

志げは「半日」への異論という形で、自身の手によって「波瀾」という新たな物語を書き上げたが、そのテーマやアプローチを鷗外とは正反対に据えることによって、自らの主張を明らかにするとともに、独自性や創造性をも発揮したのである。

志げは、ともに結婚生活を営むパートナーの鷗外が、露悪的にその内実を切り取ったことを大変嘆き悲しみ憤ったが、執筆という同一の対抗手段を授けられた際に同様の作法は選択せず、対照的なやり方によって己が結婚生活の美しい始まりを描いて見せた。それは、志げが心の中で永々と大切にしてきた宝物としての物語であった。

「波瀾」というタイトルは、この一見するとそこまで大きな波風が立たない物語には、似つかわしくないようにも思われる。けれども、居心地の良い実家を離れ、新たに「大野」という未知の存在と暮らし始めた富子には、小倉での生活を取り巻く全ての要素及び心の動きが「波瀾」と呼べるものであったのではないか。失敗に終わった最初の結婚においては自身の領域から決して出ることは無く、自らを相手に理解してもらうため一切努力しなかった富子が、大野との再婚では、誠実に向き合い自己開示と相互理解を重ね、距離を縮めていくこととなった。それは富子にとっては、紛れも無く「波瀾」であった。表面だけでは知ることのできない富子の心の微細な動きが、そこかしこに散りばめられた作品となっている。

志げと鷗外との関係性を理解している人間にとっては実在の事物を反映した作品として興味深く読むことが可能である一方、そういった事情を一切知らない人間にとっても、互いに初婚に敗れた男女が夫婦

として新たな絆を築いていく物語として心惹かれる内容である。愛を求めて奮闘する富子の姿には、普遍性と不変性とが存在すると言える。

実は、志げの人生においては、この小倉で送った再婚生活よりもむしろ、その後に始まった東京の観潮楼での生活（義母や義理の息子も含めた大人数での生活）の方が余程「波瀾」すなわち「起伏や変化」「心の機微」に富んだ内実ではあった。だが、そんなことは、この「波瀾」という作品が書かれた一九〇九（明治四二）年時点で、他ならぬ志げ自身にも良くわかっていたはずである。この時点で、東京での生活を始めて既に七年半も時間が経っている。「子が要る」「要らない」という二人きりのやり取りをしてから相当な時間が流れ、三人もの子を産み、その内の一人は非常に短い命を終えてさえいる。[15] この「波瀾」というタイトルには、愛する人を得てしまったが故の「波瀾とともに生きる」という志げの密やかで悲壮な覚悟をも込められているのかもしれない。

注

（1）林 廣親「〈作家〉森しげ女論――小説『あだ花』の読みをつうじて――」（『日本文学』第四一巻第二号、一九九二年）。

（2）塩田 良平「森しげ女」（『明治女流作家』青梧堂、一九四二年七月）。

（3）松原 新一「作家としての森しげ女」（『月報一五』『近代文学鑑賞講座』角川書店、一九六〇年一月）。

（4）本稿におけるテキストには、以下を使用した。森 志げ「波瀾」（『森志げ全作品集』嵯峨野書院、二〇二二年三月）。
初出：森 志げ「波瀾」（『スバル』第一年第一二号、一九〇九年一二月）。

（5）国土交通省「鉄道主要年表」二〇一二年一一月 https://www.mlit.go.jp/common/000227427.pdf（二〇二三年四月二〇日閲覧）。

（6）川上 幸義『新日本鉄道史』上・下（鉄道図書刊行会、一九六七―一九六八年）。

（7）『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇〇年一二月）。

（8）森 鷗外「小倉日記」（『森鷗外全集 第一三巻』筑摩書房、一九九六年七月）には、旅程についての記述が散見される。

（9）森 於菟『父親としての森鷗外』（筑摩書房、一九六九年一二月）、森 茉莉『父の帽子』（講談社、一九五七年一月）、小堀 杏奴『晩年の父』（岩波書店、一九八一年九月）等を参照。この内、「寧國寺さん（玉水 俊虡（曹洞宗安国寺の第二七代住職）がモデル）」は、鷗外の作品「二人の友」（一九一五年発表）にはそのまま「安國寺さん」として登場する。また、それ以前の作品である「独身」（一九一〇年発表）では、「波瀾」同様「寧國寺さん」として描かれている。

（10）園田 三郎 編『官私立学校案内』（文学館、一八九一年一一月）。

（11）前掲（9）『晩年の父』には、次女の杏奴による次のような証言がある。
母は、その頃の文学少女の一人で、仕立物の衣類の下に、貸本屋から借りて来た、紅葉、露伴、鷗外といった人々の小説本を忍ばせ、折々読むのをたのしみにしていたという。（中略）後年、母が私にいうのには、他の人の小説中に登場する男性には、心を惹かれるほどの人がいないのに、鷗外の小説中に現れる男性は実に好もしく、非常な魅力を覚えるというのである。母は父の小説『舞姫』の主人公、太田豊太郎に恋をしたのだが、現実の父に出会い、幸いにしてその夢を破られずに済んだ訳である。

（12）石川 啄木は、一九〇九（明治四二）年三月八日の日記に「森先生の半日を読む。予は思つた、大した作では無論ないかも知れぬ。然し恐ろしい作だ――先生がその家庭を、その奥さんをかう書かれたその態度！」と書いている。また鷗外の死後、長女の茉莉は前掲（9）『父の帽子』の「半日」で次のように述べ、このような作品を世に発表した鷗外への苦言を呈している。
私達は、父の小説の中の一つによって永遠に、「狂人染みた女から生れた系族」という感じを受け、永遠にそれに纏わられて生きて行かなくてはならない、母の系統の遺児の中の最年長者として、時には切ない心持になる。狂人染みた細君は他にもある。夫が堪り兼ねて姑の肩を持ち、細君を罵る事も、何処にでもある事である。その夫が文学者であった。殊に鷗外であった。これが私の母の不倖である。

（13）前掲（9）「母から聞いた話」（『晩年の父』）

（14）前掲（9）「父の死と母、その周囲」（『父の帽子』）で長女の茉莉は次のよう

に述べる。

人間が死ぬる時、親しい家族の人達とだけで暮すことの出来る月日には限りが、あった。（中略）父と母との二人だけの、最後の平和な生活は、短かった。純粋な生活は人間の世界で、いつでも短いもので、あった。楽しかった小倉の生活も同じことで、ある。小倉の生活が短かったのは、大ぜいの家族との生活、より以上に対世間的な生活が、東京に二人を待っていたからで、あった。

また、前掲（9）「Ⅲ父親としての森鷗外　鷗外と女性」『父親としての森鷗外』内で、長男の於菟は以下のように解説している。

小倉での二人きりの新婚生活は彼女にとっても非常に幸福であった。母はこのままの生活がいつまでも、東京に帰ってもつづくものと考えた。しかし東京で複雑な家庭の主婦となれば、夫の母、弟妹、先妻の遺児に対し義務づけられる事が山積していた。

（15）「波瀾」が書かれた一九〇九（明治四二）年時点で志げは、長女茉莉、次男不律、次女杏奴の三名を産み一名流産している（不律は生後僅か半年で夭逝、三男類は一九一一（明治四四）年に誕生）。「波瀾」の中でも、富子がこの後「三人の子を生んで、一人の子を流産して」いくことが予言されている。

（本学大学院博士後期課程）